

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【桜木小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	今年度、国語・算数を中心に基礎学力は安定して定着し、市調査でも全学年で市平均を上回った。一方で、算数の「小数の構成・割合・単位数・立式」、国語の「話す・聞くの技能」、社会の「地図・位置情報」、理科の「対流・電気・地球領域」など、学年間に共通する概念理解の弱さが課題として明確になった。そこで次年度は知識を実生活や複数の課題と関連付けて理解させるよう取り組む。具体的には、実生活データを活用した問題場面の提示、図・表・数直線を使った意味理解の補助、実験結果を言語化する活動などを計画的に取り入れ、児童が「知っている」を「理解し使える」に高められるようにする。また、「要約・伝え合い」の活動を継続しつつ、習得した知識を友達に説明する時間を単元内で必ず位置付け、知識の定着と意味理解を結び付ける授業づくりを推進する。
思考・判断・表現	今年度は、国語・社会・算数を中心に根拠を基に考え表現する力が伸び、話し合いを通じて考えを深める児童も増えた。しかし、算数では必要な数量を選び立式する場面、国語では複数根拠の整理、社会では地図的思考、理科では観察結果の図表化や課題設定など、「情報の整理と構造化」に課題があった。記述式では無回答も見られ、思考過程を言語化する力の伸長が必要となる。次年度は、各教科で「思考の可視化」を日常化する。短時間作文・図解による説明、理由付けを伴う比較活動、条件整理ワークなどを毎時間・毎単元に組み込み、思考の筋道を自分の言葉で表現する習慣を育てる。また、実生活と結び付いた課題解決型の学習や教科横断的な言語活動を導入し、複数の情報を比較・統合しながら論理的に説明する力を高める授業改善を進めていく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p>&lt;学習上の課題&gt; 国語「文法・漢字」 算数「測定」</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 定着度の底上げが必要。個人差があるので、個に応じた指導の充実や多様な学び方の工夫をする必要がある。</p>	⇒ 基礎基本の定着を図るために、実生活の場面や実際のデータを取り入れた練習問題に取り組み、わかったことを文章に要約したり、習得した知識を友達と伝え合ったりする時間を設ける。【毎単元】
思考・判断・表現	<p>&lt;学習上の課題&gt; 国語「読むこと」「書くこと」 算数「データの活用」</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 習得した知識・技能を活用できていない。言葉や図等、様々な方法で表現できるように指導の工夫が必要である。</p>	⇒ 課題をもとに学習を振り返り、自分の言葉でまとめ、友達と共有することを積み重ねる。その際に、思考の長れを図式化したり、理由付けたりすることを意識する。【毎時間】
		⇒ 目的に応じて読み、条件を整理して自分の考えをまとめ、書いたり話したりして表現する言語活動に取り組む。【毎単元】

全国学力・学習状況調査  
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	A	学校評価「学習内容はよくわかりますか」の肯定的回答は昨年度同様94%となった。児童の実態を把握し授業が行えたといえる。また、市学習状況調査においても全学年で市平均を上回る結果だった。基礎基本定着のために実生活場面や実際のデータを取り入れた練習問題に取り組みたり、わかったことを文章に要約したり、習得した知識を友達と伝え合ったりする時間を授業の中で意図的に設定した。職員アンケート結果から、88%以上の教員が授業改善の工夫に取り組んだことも分かった。そして、個別最適な学びが進むよう、学校課題研究を生かし、全教職員が学期1単元以上、単元構成を工夫したり、授業の進め方を工夫したりすることもできた。
思考・判断・表現	A	市学習状況調査「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができていますか。」の質問項目で肯定的回答が市平均を上回る94.8%となり、「主体的・対話的で深い学び」の項目全体において高い回答結果であった。課題をもとに学習を振り返り、自分の言葉でまとめ、友達と共有することを積み重ねる授業に取り組んだ結果だと考える。思考を図式化・理由付けする、目的に応じて読む、条件を整理して自分の考えを書いたり話したりして表現する言語活動にも9割以上の教員が意識的に授業の中で取り組んだ。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語・算数・理科すべてにおいて、全国・県平均を大きく上回る結果となっており、基礎的な学力の定着が良好である。特に漢字や語句の理解、計算技能、理科の基本知識に関しては高い成果を示している。一方で、同音異義語の使い分けや分数・割合の意味理解、理科の知識の応用には課題が見られた。これら課題を克服するために、国語では辞書を活用した語彙学習や文づくり活動、算数では図や実例を用いた意味理解、理科では実験結果の考察や仮説検証を通じた知識の応用育成等、知識を単なる暗記に留めず、文脈や実生活と結び付けて活用する学習を充実させていく。そして、知識を活用する場面を意図的に設けることで、表面的な理解から実践的な運用力へとつなげていく。
思考・判断・表現	国語・算数・理科すべてにおいて、全国平均を上回る成果を示しているが、記述式問題では無回答率が高く、課題が残る。国語では複数資料の要約や関連付け、算数では分数や割合の意味理解と説明、理科では実験結果の考察や仮説検証において、思考を言語化する力が十分とは言えない。これらの課題を克服するために、児童が自らの考えを整理し、根拠をもって表現する活動に重点をおいて授業づくりを行う。(例えば、短時間作文や図解による説明、実験の振り返り活動などを通して、思考の可視化を図る。さらに、教科横断的な言語活動や実生活に結び付けた課題解決型の授業を通して、より深い思考と豊かな表現力の育成を目指していく。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語・算数を中心に基礎学力が定着している。国語では、語彙・漢字・文法の正確さが各学年で市平均を大きく上回り、小6では主語述語・修飾関係の理解や文章と図表の対応などが90%超と高い。算数も計算技能が安定しており、3位数×1位数の乗法、小数・分数の加減混合計算、体積や角の性質などの標準的内容がどの学年でも高水準である。社会では歴史・政治の基礎理解、理科では金属の熱伝導や受粉の仕組み、ふりこの周期など、観察や実験に基づく事理解ができていく。
思考・判断・表現	一方、概念理解が不十分であり、各学年や各教科において共通の課題である。算数では小数の構成、単位数、割合、立式など「数量の意味」、国語では「話す・聞くの技能」、社会では「地図記号や位置情報の処理」、理科では「対流・電気・地球領域」と抽象概念に課題が残る。基本技能は身に付いているが、知識と意味を結び付けて理解したり活用したりすることができなくなっていく必要があり、これらを意識して指導することで、より確かな学力が形成されていくと考える。
	市平均を上回る結果であり、特に国語・社会・算数を中心に、根拠に基づいて考え表現する力が伸びている。国語では、自分の考えと根拠の結び付け、段落構成、図表・引用の活用などが小6で86~93%と高く、聞く・話す場面でも要点把握や比較に基づく整理ができていく。算数では、動画問題の処理(状況把握→判断→計算)が全学年でできており、特に5・6年で速度・変化・割合など応用課題への対応が向上している。社会では資料比較、因果の説明、複数資料の統合、政治・歴史領域での判断ができていく。一方、「情報の整理と構造化」が課題である。算数の立式では必要な数量を選び出す段階でつまずきが多く、国語でも複数根拠の取舍選択や論理の一貫性に差が見られる。社会では地図の空間情報を基にした思考が弱く、理科では観察結果を図表化したり、課題設定へつなげたりする場面で課題が残る。思考力・表現力が高いが、情報を比較し、構造化して筋道として示す力を育てていく必要がある。

③	中間期報告	中間期見直し	
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	職員アンケート結果からは一定の成果が見られた。分かったことを文章に要約したり、友達と伝え合ったりする活動が授業に定着しつつある。また、単元構成や進め方の工夫により、個別最適な学びへの意識が高まっている。一方で、実生活に結び付けたり、データを活用したりする学習の取組には課題があるため、習得した知識・技能を様々な場面で活用できるように指導していく。	変更なし
思考・判断・表現	B	児童の思考力や表現力を高める授業に意識して取り組んでいる教員が多い。授業の中で振り返りや考えの図式化、友達との学び合いを通じて、思考の可視化に取り組んでいる。また、書いたり話したりして考えを表現できるように、目的に応じた言語活動を授業に取り入れ工夫している。今後は、さらに記述力を高め、主体的に学習し表現する力を伸ばしていく。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)